

ロールシャッハ・テクニクに於ける形態水準判定法の発展と問題

田 中 富 士 夫

ロールシャッハテストの解釈はまず被検者の反応を幾つかの側面から分類する所謂判定 (Scoring) の手続から始められる。判定には反応の位置づけ、決定因、内容及び獨創性—通俗性の四種のカテゴリがあり夫々特定のサインが与えられ更に質的な評価として反応形態の良、不良即ち形態水準 (形態質) の判定が行われる。現行のロールシャッハ判定法は、Rorschach⁽¹⁾ の伝統を受けつぎ更に発展せしめたものであるが諸家の手続は必ずしも全面的な一致を見るに至らない。特に形態水準判定法は最も未解決点の多い領域である。その理由の一つは Rorschach の記述の曖昧さにも由来するが又この指標の心理学的解釈上の差、更に形態水準がこのテストで占める役割のウェイト等の差異が挙げられよう。本稿ではこの問題について Rorschach 以来の諸家の見解を概観し改めて現在解決を迫まられている問題の若干を検討したい。

Rorschach⁽²⁾ は形態反応に於ける質の評価をかなり重視した。彼は形態反応 (F) を良好形態反応 (F+) と不良形態反応 (F-) に分類し F+ の臨床的意味を明らかにした。即ち多数の正常者 (約一〇〇名) に相当数出現するような形態反応が F+ の基準 (下限) とされ、そのような反応より以上に優れている反応を F+、以下の反応を F- としたのである。従つて F+ 反応の限界は統計的な頻度によつて決められたが頻度の少い反応は基準反応より優れているか劣っているかという判定者の主観的判断に委ねられねばならなかったのである。それ故或る程度の主観的判断のズレが生ずるのはやむを得ぬこととして彼はプロトコル解釈に際して F+ の F- の差は有意味とは看做さない。このようにして Rorschach はいわば主観的评价と客観的統計的基準の両者を綜合した方法を

採用したのであるが、その具体的手続が明らかにされていないかったため以後の研究者達は主観的判断、統計的頻度そのいづれを重視する立場に立つか或いは正常者で相当数現われるとはどの程度の頻度と解すべきか等について諸種の見解の相異が生じたのである。例えば、本明は小学生にロールシャハを実施して具体的に一〇〇例中どの程度の出現率をもつ反応を「+」反応とすべきかの問題を検討した。そして平行的な二つの同種群で同一出現率をみる如き反応をもつてその基準とした時には「+」以上の出現率を有する反応が「+」の条件に適用していることを見出した。このようにして得られた結果は Rorschach の判定ともよく一致し、知能・学業成績・精神発達等の指標と対照しても妥当な基準たりえたのである。⁴「+」以上という統計的基準は Herz が三〇〇名中一二三回 (4.3%) 現われる反応を「+」とした事実とよく一致するが、「+」以下の反応を全て「+」とすることには問題が残っている。反応の出現率とその反応の形態水準との関係は Klopfer の如く正規分布すると考えない迄も両者が直線的な相関関係にあると看做すことは出来ない。例えば Kimball⁵⁾によれば P 反応といわれる程の頻度の高い反応にも優秀な形態から不良な形態に至る迄の諸種の程度の形態水準が中広く分散していたのである。少くとも Rorschach の指摘するように形態視の非常に鋭い反応や極端に形の崩れた反応の頻度は低く、中間的な形態質の反応が最も多く出現すると期待しなくてはならない。

Rorschach はそうした低い頻度の反応には「+」と「-」の両者が含まれているとして夫を主観的に評価するという手続で補ったのであり、その時「+」の最下限として頻度の高い反応を基準に用いたのである。従つて「+」以下の出現率をもつ反応には良好な F 反応が含まれている可能性があり夫等を全て「+」と判定することは出来ない。所謂 O 反応が一〇〇名に一回現われる反応と規定されており、それらの反応の中には O + と判定される良形態を有する反応が含まれていることからこのことは理解される。なお「+」反応の基準を反応出現率に求める際には少くとも成人の反応に基いて算出されねばならないであろう。

Herz は比較的初期 (1936) に形態水準のみならず全てのロールシャハ判定の頻度表を発表した一人であり現行の第三版 (1951) のリストには一才から一六才までの被検者一、三五〇名の全反応の判定が記載されている。彼女も矢張り形態水準を「+」と「-」に分類した。その判定手続は、まず反応の統計的頻度によつて「+」となる反応が決められ、次いで頻度の低い場合は頻度高き反応との類似性によつて同様の判定を受け、更に疑わしき場合には三名乃至五名 (現行改訂版では三名) の判断者が反応領域の形と反応概念の形との対応度或いは適合度を主観的に評定して決定するのである。その具体的な判定手続の詳細は明らかではないが、可成り多数の被検者の反応資料に基いている点で判定の参考資料としての利用

価値は高いが、被検者の年令的範囲が狭いこと、異常者の反応に乏しい点などの欠点を有する上リストに記載されていない新しい反応を如何に処理すべきかというリスト法固有の難点が残されている。

一方 Beck の Hens とは異つた基礎に立ちリスト法を發展させた一人である。彼は Rorschach の伝統に比較的忠実であるが、正常者に相当数現われる反応は P 反応を除けば極く限られた数であつて實際上 Rorschach の手続では殆んど全く主観的判断に頼らざるを得ないことから、E₊ 反応が弁別し得て而も夫が安定した物指しとなりうるような反応リストの作製に當つたのである。彼によれば外界を正確に認識し良き知的統制力を有する平均人或いは優秀人がロールシャッフで見出す形態は現実 (Reality) であり斯かる反応は E₊ である。之に反して精神薄弱者や精神分裂病者が見出し健康人では認められないような形態は非現実的であり E₋ とされる。彼のリストは結局一五七名の健全な平均人の記録を基礎にして構成されているが、夫等の全反応ではなく、

① E₊ 反応の中核ともいふべきよく出現する反応

② 明らかに E₊ 反応、E₋ 反応とわかるものからいへんな程度にズレていて判定し難い反応

の二種類の反応が含まれている。このリストに記されていない反応に遭遇した時には、その反応が既知の E₊ 乃至は E₋ の形に準じているなら夫々 E₊ 或いは E₋ と判定される。し

かし全く既知の反応に類似していない場合にはテスト経験に基いて夫等の反応が健康者の反応形態質を有しているか或いは病者にみられる歪んだ形態質であるかを吟味した上で E₊、E₋ を判定するのであり、斯かる際には可成りの主観性と経験因子の介入を免れ得ない。以上の如く大低の反応は E₊、E₋ に分類されるが、若干の非常に小さい Dd 反応は判定されずにそのまま F とだけ記される。之等の反応は極めて稀な反応であつて、その様な領域を選ぶ人が殆んど無いために E₊、E₋ を知ることが出来ないのである。こうした反応の出現頻度の問題を更に検討したのは Walker である。彼によれば、正常者で発現しない反応が異常者で屢々現われることがあるが (例えば F₂ 等) それは形態質の差ばかりでなく内容の問題にも関係している。従つて正常者でその様な内容の反応が現われ難いからといつて直ちに E₋ 反応と断定するわけにはいかない。又選択され難い領域に対する反応は当然反応出現率が低くなる。そしてそれ故に E₋ 反応とするのは不合理であるとして次の如き実験を試みた。まずロールシャッフにナイーブな一〇〇名の正常成人にロールシャッフ・スライドを見せ Beck のリストから選んだ三二九個の W 反応を呈示し、インク像と反応概念がよく適合しているか否かの二分法で評定させた。得られた結果は、よく適合していると記した人数によつて適合度を決め低い方から 38%迄を E₋、それ以上を E₊ 反応と定めた。(これは Beck のリストで W 全体の 38%

がF₁反応であったことに基く)斯くして得られた判定基準は正常群、精神分裂病群の鑑別に際してBeckのリストよりも高い妥当性を有していたのである。Walkerの実験は従来の反応出現率という概念が選択される領域の頻度との関係を充分考慮していなかった点を再認識させたという点で高く評価されねばならないが、ロールシャッハに未経験の評定者が適合しているとした人数と形態水準が一義的な関係にあるかどうか、又呈示されたインク像に対する自発的反應(ロールシャッハ場面)と概念、インク像領域共に呈示され夫等をいわず比較しながら選択する反応とを同一視するわけにはいかない等の疑問が生ずる。このことは例えばMcReynoldsのRorschach C E TのV得点と通常のロールシャッハのF + %、或いはHarrower⁽¹²⁾の選択ロールシャッハ法と通常の自由連想式のロールシャッハ法とを同義に解することが出来ないのと同じである。

他方、Klopf⁽¹³⁾er はリスト法に依らず、どちらかといえば主観的な評価に重点をおいて形態水準の判定を行い最近、形態水準評定尺度を發展させるに至った。彼は最初(1942)形態反応の重要な因子として反応の正確さ(accuracy)と明確性(definiteness)とを区別することに着目した。この点はRorschach が判然と区分しなかったところであって、テスト技法に於いて系統的な質疑法が導入されて始めて処理可能な段階に至ったのだといえよう。結局 Klopf⁽¹³⁾er は形態反応を三

分して、F₁ + F₂、F₁ - とし不明確反応を形態水準判定の圏外へおいたのである。彼はまず形態の正確さを規定する要因として

- (1) 被検者が与えた概念の形態質
- (2) インク像領域の形態質

(3) その概念の一般的(通念上の)形態質の三者をあげ(1)と(3)及び(1)と(2)にズレを生ずる時に不良形態(F₁ -)が生ずると考えた。前者は精神薄弱者や精神疾患患者でみられるように彼等の概念の形自体が既に一般的な社会通念と相容れない場合であり、後者の場合には、全く恣意的な反応、固執反応、作話反応、位置反応等のメカニズムが指摘された。中間的な形態質の反応(F₂)には、①インク像の大雑把な特徴だけを利用し大きなズレは見られぬような安易な反応、②不明確な曖昧な反応でインク像と概念との間にズレは認められぬ時、③形態因子以外の決定因と結びついた不明確形態を有する反応及び④通俗形態反応等が含まれる。又、平均以上の反応(F₁ +)とは、①彫琢(elaboration)及び②結合化(organization)が良好適切に用いられている形態反応である。以上の様に Klopf⁽¹³⁾er は反応の正確さと明確性の区分を明らかにした上で夫々の形態水準の反応成立メカニズムを分析し判定に際しては主観的に之を評価するという方法から出発したのであるが、その後(1946)形態水準の名の下に判定すべき対象を、反応の①正確さ、②明細化(specification)及

び③結合化の三者であることを明記し更にサイコメトリックな形で記述するために評定尺度を用いるに至った。それはまず、〇を中心として-2から+2に亘る段階尺度に基本評定を行った上で夫々の附加的特徴に応じてクレジットを加減し最終的には、-2.0から+5.0に至る0.5段階毎の尺度に評定される。基本評定はほぼ次の様な基準で反応に対応している。

- +2 優秀成人の反応 (〇+)
- +1 平均成人の通俗反応 (P)
- 〇 不明確乃至は二次性形態反応
- 1 平均以下の成人の反応
- 2 精神疾患の反応

クレジットは優秀な自発的明細化や結合化に際して、基本評定点に夫々1点加えられ、反応の形態水準を低下させるような消極的明細化があると1点減ぜられて最終評定点に至るのであって、最も優秀な形態水準の反応は+5.0、最低は-2.0、その間に+1.5 (P反応に近い程度の通俗水準の反応)、+0.5 (通常現われる半明確反応)、-0.5 (+1.0より稍正確さの劣る反応)、及び-1.5 (作話反応)等の中間段階がある。この尺度はしかし、反応の明確性と正確さの両者を区別しながらも究局に於いては同一尺度に含めようとする矛盾に陥っているように思われる。例えば〇と+0.5の段階は形態の正確さ(反応領域と反応概念の形の上での適合度)の次元ではな

くて明確性の欠如の段階を示すものであり、正確さという点からみれば、+1.0から-0.5と連続する尺度でなければならぬ。Koplerは最近の著書⁽⁸⁾(1964)で形態水準判定に一章を費していることから窺われるように形態水準の判定を単なる形態反応の下位分類という位置から、決定因や内容などと同じ様なカテゴリーの一つと看做し得る程に重視していることが知られる。そこで彼は形態水準評定尺度の適用範囲を一層厳密に規定し用語の定義を明確化している。形態水準は前記のように反応の正確さ、明細化及び結合化の三者から判定されるが、第一の正確さとは反応の中心概念の一般的な形とインク像の形との間の適合度と解され、その程度によって①正確反応、②半明確反応或いは不明確反応及び③不正確反応の三者に分類される。正確反応とは反応概念が明確な形を有し而も夫が反応領域の形とよく適合するもの、半明確、不明確反応とは概念の形が本来漠然乃至は多様性を有するために如何様な形の領域にでも適合する如き反応、不正確反応とは明確な概念が明確な領域に与えられるが両者が対応していない場合及び不明確な概念が余りに明確な領域に与えられた場合である。評定対象の第二の側面である明細化とは本検査(least proper)乃至は質疑の段階で反応の中心概念以外の様々な附加的説明や彫琢が自発的に行われることを指す。明細化は、建設的明細化、無関係明細化及び弱化的破壊的明細化の三者に区分される。

建設的明細化とは反応の中心概念をより高度に分化し洗煉する如き明細化であり之には形態明細化と決定因明細化の両者がある。前者は概念の形を細部に亘って調和的に敘述するものであり後者は形態以外の決定因を用いて同様に調和的に詳細な敘述を行うものである。無関係明細化とは中心概念の形態水準に影響を及ぼさないような明細化であつて之には重複せる明細化、その概念に本質的でない決定因明細化、不明確概念に於ける決定因明細化及び冗談、思考、感情等の反映に過ぎない明細化等が含まれる。弱化的破壊的明細化には中心概念を根本的に破壊する如き影響をもつ場合と概念対領域の調和を乱す程度のものがあげられている。形態水準を構成する第三の要素は結合化である。結合化とは分離した部分領域を結合して意味のあるより大きな概念を構成することという。尺度の構成法は前記の通りであり、夫々の評定点に該当する規則が詳細に定められており、プロトコル内の全反応の形態水準が評定され最後のには、平均形態水準 ($\bar{A}_V F.L$) 重味づけられた平均形態水準 ($\bar{A}_V W. F.L$) 及び最高形態水準 ($E.L. H_0$) 等が指標として利用される。

以上の様に Klopfer の主観的判定法は非常に精練された評定尺度法へと發展して来たのであるが、反応の正確さと明確性の関係は依然として問題である。明確性の語は反応概念の明確性、反応領域の明確性及び反応の明確性の三種に用いられている。概念の明確性とは概念の特殊性、複雑性と同義と

解され、「雲」の形より「犬」の形がより明確であり更に「ねそべっているスコッチテリア」の方が一層明確な概念、つまり形の規定条件が多く且つ細かくなつて来ると思われる。

之に対して領域の明確性は判然としない概念である。彼は明確な領域の例としてⅢの中心の赤いDやⅣの側方の桃色のDをあげている。之等はおそらくⅦのWなどより明確な領域であろう。しかし領域自体の形が明確か否かは夫に対応する概念を予想しなくては決められないのではあるまいか。ロールシャッハ図形と正方形はどちらが図形自体として明確か、円と三角形ではどうか等という問は無意味である。従つて領域の明確性とは意味づけの困難さと関連する概念であり、明確な領域とは明確な概念によく適合し、そのような概念の出現率が非常に高い程意味づけ容易な比較的多義性に乏しい領域という意味と解される。反応の明確性についても同様のことがいえる。要するに明確性とは概念についてだけ言えることで領域の属性ではない。この点は評定手続の根本的観点に関係すると思われるので少し詳細に触れた。Klopfer が明細化を形態水準に加えたのは彼らのテスト実施法の發展と密接な関係がある。しかし質疑資料を余りに重視すると質疑知見が得られない時の処理が問題となる。又結合化は、彼にあつては基本評点に $\frac{1}{2}$ 点のクレジットを一回加えるだけに留り質的な考慮は余り払われていない。明細化と同様に建設的結合化、弱化的結合化等に分類すべきと思われる。Klopfer の尺

度法自身理論的な根拠というよりむしろ経験的に構成されたと考えられるから最終的な批判と評価は矢張り臨床的妥当性の面から加えられねばならない。本明・富田はこの尺度を大版ロールシャッフ・テストに適用し従来⁽¹¹⁾の $E+\infty$ 法と形態水準評定尺度による指標との妥当性を比較し Klopfer の手続について若干の批判を加えている。その結果、知能診断や統制診断では従来の $E+\infty$ を用いるより $Av. W-F.I. \& F.I.-Hat$ の方が望ましいことが知られた。しかしこの評定法が技術的に遙かに繁雑で主観性の介入する余地が少なくないことや段階の区切り方例えば上限が+5.0以下限が-2.0なることの理論的根拠に乏しいことなどを指摘している。又、村上・野田⁽¹²⁾は年少児の知能診断にロールシャッフの形態水準評定を用いる方が従来の $E\infty, F+\infty, A\infty$ 等を用いるより有効なことを見出したのである。一方 Spiegelman⁽¹³⁾はロールシャッフの形態水準を知能評価に用いる研究に於て $Av. F.I.$ と $W-B$ 尺度の $V.I.Q.$ が高い正相関をもち $F.I.-Hst$ と $Maher$ 法によつて得られた最高 $W-B$ 尺度の $V.I.Q.$ とも高い正相関を有することを実証した。興味ある所見として彼は $Av. F.I.$ の $I.Q.$ 推定の精度が低知能群では高知能群より劣ることを見出した。これは尺度がマイナスの方向に狭くプラスの方向に拡がっているためにほぼ-1.0を中心として分布する平均知以下の反応をよく弁別し得ないためであつて尺度構成上に修正が望まれるところである。

形態水準の主観的判定に重点をおくもう一人の研究者に Rapaport⁽¹⁴⁾がある。彼はロールシャッフ反応の成立を知覚過程と連想過程の相互作用に求め、形態水準は①インク像の知覚印象に調和的な連想を供給する過去経験の豊かさ、②インク像に対抗しうる知覚上の分節化と鋭さ及び③反応概念と反応領域との一致度を批判し得る能力等によつて決定されるとし $F+, F+, F+, F+$ 及び $F-$ の四つの判定段階を設けた。 $F+$ 反応は根本的には良好反応なるも知覚的体制化が幾分弱いもの、 $F+$ 反応は不良反応ではあるが良好な知覚的体制化の跡が幾分認められる反応である。判定の手続としては Rorschach 以来の伝統にはば従い反応出現率とその反応の共感性に基づく。従つて共感し得ない反応も頻度が高ければ良好反応とされ頻度が少くとも共感可能なら矢張り良好反応と判定される。このように主観的判定といつても、Klopfer の如き分析的態度をとらず、その反応が判定者に emphasize されるかどうかという点を判定基準にしている点は判定上のバイアスを大きくするものといわなくてはならない。しかし彼は臨床的には⁽¹⁵⁾質的な分析を試みる。一般に形態反応は $special F+, special F-, F+$ 及び $F-$ の四種に分類することが出来る。 $special F+$ は形態視が鋭く容易に了解しうる反応、 $special F-$ は恣意的で共感し得ない反応、 $F-$ は平均的な反応である。 $F+$ 反応は漠然形態反応であつてインク像の漠然なる特徴を利用する以上には至らない退行的な傾向を示す反応であ

る。典型例としては不安の際に出現する W_v 反応があげられる。このように Rapaport の特色は判定方法や判定段階の定め方等にあるのではなくて、むしろ反応成立を臨床的乃至は発達の観点から評価しようと試みた点にあると思われる。しかし発達の観点を更に発展させたその後の研究者達は形態水準の問題としてではなくむしろ領域選択 (location choice) の下位分類のスコアとしての発達記号 (genetic sign) を作り上げた。Siegel⁽²⁷⁾ が反応の発達の側面から分類した $W++$, $W+$, Wm , Wv , $W-$, Wa (D 反応についても同様) 等のサインは Friedman⁽²⁸⁾ によって精神分裂病に於ける知覚機能の退行現象の解明に有効な指標たり得ることが示されたのである。

Phillips⁽²⁹⁾ は現行の形態水準判定の欠陥を除去する一つの試みとして、まず反応の基礎形態 (内容) と彫琢とを区別することから出発する。全てのロールシャッハ反応はその言語化 (verbalization) の量とは無関係に基礎形態 (内容) と彫琢の両者に分けることが出来る。そして正確さの判定は基礎形態に対してなされるのである。判定基準は正常群の反応から導き出される。即ち、正常群が或る概念 (例えば「人間」と同じ内容の概念を与えた全ての領域を分析し、之等の領域全てに共通な形態特徴が見出されるなら斯かる特徴がその特定概念 (「人間」) の正確さを評価する基準として用いられる。従って或る概念が正常群では現われないような領域に与えられ

た時でも、領域がその概念の共通特徴を備えていれば $W+$ 、さもなければ $W-$ と判定される。ただその内容の概念が正常群で何処の領域にも出現しない時は基準が無いため判定出来ない。このような手続で夫々の概念の基準が決められ、例えば「人間」なる概念が $W+$ となるために対応する領域の形が具備すべき最少限の条件とは、①明瞭な「頭部」、②巾より長い「体」の部分及び③「手、足」となるべき細長い部分を有していることである。従ってまず第一に全内容の分析が必要である。彼は Beck の内容分類に従い反応内容を領域に要請される形の複雑性と特殊性に応じて七個の級に分類した。例えば $W+$ 反応はインク像の領域の構造上に殆んど条件を要請しない故に第一級とされるに反し、人間や動物反応は極めて特殊な形態を必要とするので第七級と分類されている。第一級から第七級迄の七つの級は夫々一個以上の内容カテゴリーを含み、その各々のカテゴリーが $W+$ 反応となるための条件を記した表が用意された。その上斯かる基準を Beck のリストの全反応に適用した結果を掲げている。反応概念を構成するもう一つの要因である彫琢は次の如く分類される。

- (1) 優秀彫琢
- (2) 部分敘述 (descriptive detailing)
- (3) 不良彫琢
- (4) 合理化 (rationalization)

優秀彫琢に含まれるのは、①適切な類概念を用いて自分の出

した種概念との種差に気付いている場合（「犬とか熊といったような或る種の動物」）、② Book の Z に相当し而も適切な表現（「柵越しに二人の女が話し合っている」）、③ 領域の構造と概念の適合性に気付いている事を示す所謂「証拠資料」（evidence）の使用（「人間です。いいや足が釣合わないから小人ですね」）、④ 時間、物理的性質、美的評価、文化的教育的な巾の広さ等を示す形容詞の使用（「古代の」、「ペルシャ風の」）、⑤ 非形態決定因を普通以上に用いている等の場合であり、部分敘述とは六、七才の児童にみられる反応概念の部分を呼称するものである（「男の人。ここに頭があつて手はこれ足はこつち」）。第三の不良彫琢は反応の質を著しく低減せしめる彫琢であつて、それには①虚構的結合（「鼻が二つある人」）、②構造が不適切な彫琢（「DIO が兎で D が兎の顔」X）③内容が不適切な彫琢（「熊が街頭を歩いている」）などが含まれる。最後の合理化とは基礎形態が不適切（E-）な反応を変容しようとする試みが成功せず基礎形態の修正に失敗した場合を指す。扱つて Phillips は E- 反応を更に四段階の水準に区別する。それは E- 反応の中には E+ の基準から僅かにズレた健康者の反応から精神分裂病患者にみられる如き著しく歪曲された反応に至る迄種々の程度があり、又知覚の歪曲の程度が行動障碍の程度に関係しているとの立場から、E- の程度の分類が臨牀的に価値を有すると仮定するからである。

第一水準。E+ の基準が最少限ズレているような E- 反応。例えば、或る領域に対して「猫」は E- で「犬」は E+ と判定される時のように動物反応に於いて同種動物の或るものは E+ だが或るものは E- となる如き場合（第一規則）や、II の D- や VIII の D- は共に同種の動物内容が出現し易いが前者に対する「人」は E+ であるが後者に対する「人」は E- 反応と判定されるような場合（第二規則）の不良反応である。

第二水準。インク像の構造とのズレの程度が第一水準の反応よりも可成り大きくなり E+ の主要条件を欠く場合である。この水準の反応は質は悪いが何故その反応が生れたかの了解が可能であり、従つてその内容がインク像領域に全く無関係ではないという程度の反応（「小鳥」II D 2）。

第三水準。その領域に境界（区切り）があるとか統合性（まとまり）があるとかいった特徴以外は全く反応内容を成立せしめる条件を満たしていないような恣意的な反応（「鳥」I D 8）。

第四水準。第三級から第七級の内容で基本的な二つの条件即ち境界の存在と統合性あるインク像構造が無視された場合（「体」X W）。

以上の如く Phillips の特色ある手続は第一に基礎形態と彫琢とを分けたこと、第二には形態の明確性を七個の級に分類し独特な判定基準を設定した点、第三に E- 反応を更に細分し

たことを挙げることが出来るよう。しかし第一の点は甚だ問題と思われる。例えば、「人間」の形態が「+」と判定される基準としては前記の三項目「頭」「細長い胴」「細い手足」等が存するた点を挙げることである。けれども、之は人間が立つてゐる姿を示す一つの場合に過ぎず、この条件に適合しない全ての人間反応を直ちに「-」反応と断ずるわけにはいかない。立つた姿以外の諸種の姿勢が考えられるからであり、若し坐つた姿、立つた姿等々についての共通特徴（基礎形態）を求めていくと結局それは最初に企図された処とは異なる極めて抽象的な漠然としたものになってしまう。要するに反応を基礎内容と彫琢とに機械的に区分することは不可能と思われる。

第二の明確性の級分けは Klopfer の分類を更に精密化した点で一步前進した手続とみることが出来る。しかし「+」の判定基準は基礎形態の条件を満たすか否かという点におかれていて、領域の形態特徴が如何に無視されているかという一面が考慮されていない。いわば必要条件は吟味されているが充分条件は無視されている。

Klopfer の尺度に近く、又或る面では Phillips にみられるような考慮が払われて独特な評定法を發展させた研究として辻を挙げることが出来るよう。彼は Klopfer と同じく形態水準を構成する要素として形態の正確さ、彫琢或いは明細化及び結合化の三者をあげ、それらの総合的評価の結果としての形態水準評定尺度を提出した。そして反応に於ける基礎概念と明

細化とを判然と区別し形態の正確さの評定は基礎概念だけに限定される。これは「基礎形態水準」(Basic form-level)と名付けられる。反応概念の一般に認められている形態と領域の形態との一致度の標準はP反応におかれ、それ以上の一致度を示すものをP反応を含めて「+」、それ以下を「-」とする。

判定は主観的に行われるが合議制によって各人のバイアスを除去しようとする。なお、この際不明確概念は長坂の手続に準じて判定の圏外におかれて F_{pm} (permitted response) とされる。その結果、基礎形態水準は①正確形態 (F_{+})、②不明確形態 (F_{pm})、③不正確形態 (F_{-}) の三者に分かれ F_{+} 反応は更に出現率によってP反応、O反応及びその中間段階に三分される。彼の明細化は基礎概念以外の反応構成要素全てを含み、その判定基準は果してその領域に明細化で述べられた「感じ」があるか否かによって同じく合議制で主観的に判定され夫々①優秀、②普通、③上記兩者の中間、④不当な明細化の四段階に分類される。結合化は、「二つ以上の独立した概念の結合表現」と規定される。独立した概念とは反応語の中に独立した概念が二個以上あるという意味でもなく又、単に用いられた領域が二個以上あって夫等が結合されて意味づけられているというだけではなく両者の総合されたものである。従つて夫等の二個以上の概念(反応)が結合されない形で独立的に存在し得るかどうかが問題である。それ故、斯かる独立性を決定するには反応出現率が有力な手懸り

となる。結合性の問題は結合の有無だけでなくその適、不適という面をも有している。結合の仕方が領域の特徴に合致しているかという項目は明細化に於いて評価される。結合化の項では二個の独立した概念の結合表現は、①現実的で調和的(h)、②不調和ではないが漠然(i)、③非現実的で不自然(d)及び④単なる二個以上の存在(n)等主として現実調和性の観点から分類される。斯かる結合化のカテゴリを結合能力(organizing ability)と名付けたのである。最終的な評定尺度は基礎形態水準で与えられた得点の上に夫々明細化、結合能力の程度によって与えられるクレジットを加減した合計点であり、マイナス及び0点から5点迄の七段階となり3点以上が優秀反応とされる。以上の如き形態水準は Klopfer の手続と極めてよく似た面を持っている。しかしこの方法を最も特色づけているのは結合性の取扱いである。まず従来曖昧であった「結合」なる概念を明確に規定した点、第二に判定対象を結合性の有無に留まらず其の適、不適に迄進めたこと、第三に結合表現の形の上での適、不適は結合的明細化の項で判定され結合化の下ではその現実調和性が吟味された点である。

(一) 判定対象の問題

何を判定するかという事は当然形態水準の定義に関係して来る。Walker の述べているように各研究者により夫々定義は

少しづつ異つてはいるがインク像の領域によく似た反応が F + 反応と判定されるという常識的な共通点にたち戻つて考察を進めたい。判定対象の第一の観点は形態反応のみを判定の対象とするか、その他の反応を如何に取扱うかという点である。Rorschach 以来 $F_1 + \infty$ の算出には通常 F_1 反応内での $F_1 +$ 反応の比率が問題とされて来たが、Rapaport では之を他の決定因を二次的に含む形態優位反応に迄拡張し夫等に於ける良好反応の比率を算出しており斯かる傾向はむしろ最近の一般の傾向を示すものといえる。その理由の一つは Rorschach では形態反応はプロトコル内の大部分を占めていたが、その後の決定因研究殊に陰影反応判定の分化に従い純粋形態反応がプロトコルで占める%は漸次低くなりもはや F_1 反応のみでレコードを代表させることが困難となつたからである。しかし Rorschach 自身も「応形態を含む各種の反応 (M, Fc, Cf)」の判定を行つていたのである。Heiss は形態を含む全反応を判定対象とし、Rapaport は形態優位反応を、Klopfer は非形態反応をも含めて全ての反応を判定の対象としてゐる。このように漸次判定対象の範囲を拡張して来たもう一つの理由はロールシャッハ・テストに於いて形態水準の意味づけが重視されて来たためである。Klopfer によれば形態水準は被検者の現実吟味機能を指すとされており夫は人格診断の第一の手懸りを示してくれると考えられる。従つて純粋形態反応以外の判定を行うということは、純粋形態反応以外の反応に含まれて

いる形態因子の質を評価するだけでなく例えば色彩の適切な用い方といった非形態決定因の質的评价をも含めること（決定因明細化）を意味する。それ故非形態反応の形態水準ということは一見矛盾しているようではあるが、実はインク像の知覚特性（形だけでなく）を如何に現実的調和的に利用し得るかという側面を形態水準と名づけているに過ぎない。斯かる拡張的解釈の是非は究局のところ、実践的な妥当性研究に於つ以外に決め手はなく現在迄の二三の結果はその有効性を確認している。

判定対象の第二の観点は、反応の正確さ、明細化、結合化等を判定することの是非である。しかし如何なる研究者も正確さを形態水準の中心におくことについては一致している。明細化の概念は Klopfer により取り上げられ次いで Phillips に至った。明細化が基礎概念と区別し得るようになったのは質疑法の発展と関係があり、またそれ故質疑方法次第で明細化の程度が左右される可能性がある。

形態水準の中へ結合化を含めることは屢々問題とされて来た。Rorschach は結合化のエネルギーは W 反応の個数で表わされるとして形態水準とは別個の次元で考察し、Back は更に之を發展させ W 以外での結合活動を指摘して Z スコアを確立した。彼も Rorschach と同様に Z を形態水準の中に含めたい。而も Z は結合化の有無乃至は量的な表示に過ぎず結合化の適切さは判定されない。これに反し Klopfer の尺度では有

意味な結合化だけが取上げられクレジットが与えられるがその規定は余り明確ではない。辻は結合化の形の上での適切さはむしろ明細化に含まれるべきと考え、Klopfer の形態明細化、決定因明細化に加えて結合明細化を追加した。

判定対象に関するもう一つの大きい問題は反応概念の明確性である。Klopfer 以来どの研究者も明確性について考慮し、形態の正確さの次元と別個に扱いたい意図が窺れるにも拘らず結局は形態水準の中に含まれたり、明確性が形態水準を左右したりする結果となっている。つまり反応概念と反応領域の対応度の尺度を考える時、どうしても概念の複雑性の因子が混入して来るのである。大低の手続では、どの領域が選ばれるかに余り関係なく規定条件の少い概念は形態水準の略中間 (E_1) に位し、規定条件の多い概念を選ぶ時はその領域の形との対応関係に従い夫々形態水準が高く (E_+) なったり低く (E_-) なったりする。然しながら概念対領域の対応に概念の複雑性は本質的な関係をもたない筈である。「概念が不明確であると如何なる領域に対しても調和する」といった意味の記述が多く文献でみられるようである。そして之に反し明確な概念に調和する領域はいろんな制約を受けるから、不明確概念と領域との調和度（適合度）はたとい非常に高い場合があったとしても、それは明確概念が領域に調和している程高くなるらないとするのが Klopfer はじめ多くの研究者の見解と思われる。果してそのようなことが真実である

うか。例えば、今不明確概念である「雲」と明確概念である「人間」の写真と夫々の實際の形との対応とを考えてみたい。「雲の写真」は真の「雲」とよく調和（適合）しているし「人間の写真」と「人間」との対応についても同様なことがいえよう。この際、どちらの調和度が高いと判定すべきであろうか。従来⁹⁶の取扱いかからすれば「人間」とその写真の一致度の方が「雲」とその写真の一致度よりも高い（形態水準が高い）とされねばなるまい。斯かる判定を吾々は承服することが出来ない。要するに概念の選択に際して形態上の規定条件の多い概念を選ぶか少ない概念を選ぶかという概念の明確性の問題と選ばれた概念の形態が領域に適合しているか否かの問題とは一義的な関連性がないという事を再び強調したい。

(二) 判定方法の問題

Rorschach 以来形態水準の判定には客観的統計的基準と主観的判断とを綜合するのが望ましいとされ現行の手続は多少とも両者を含んでいる。しかし、どちらかといへば Rapaport, Klopfer が主観的判断を重視するに對し、Beck, Hertz はリストを用いて客観的方法に頼らうとする。主観的判断には Rapaport のように共感性に依る判定を主張する立場や Klopfer のように詳細な規定を設けて出来る限り判断者間のズレを防止しようとする分析的な手続があり辻は合議制でこの難点を

越えようとする。Beck は主観性の除去には臨床的経験が有用なることを強調しており、筆者が集団ロールシャッハを判定した際にもテスト経験の効果は判定者間の評定上のズレを少くする上に役立つこと、更に判定者間の討議に依つてズレは著しく低下することが知られたのである。しかし Kinball はようにロールシャッハ経験のために生ずる偏見や先入観は形態水準判定に他の知見（内容の異常性や決定因の心理学的意味）を持ち込み易いという。一方、客観的判定法では反応の出現頻度を利用する。しかし形態水準と頻度とは一義的な関係がなく、更に出現率算出のための標本は凡ゆる条件を含めた非常に広い範囲の大集団が要求される点、Beck の如く正常群、異常群の差を用いる時は異常群の種類により結果が異なること、一層困難なことには少数の反応を除いては程度の差こそあれ正常、異常いづれの群にも出現する反応が多く両者を判然と弁別し得ないことである。現在、形態水準判定のために幾つかの反応リストが発表されている。⁽¹⁾⁽³⁾⁽¹⁸⁾ リスト法は記載されていると全く同じ反応を判定する限り信頼性が保たれ極めて有用であるが当然リスト外の反応の処理に遭遇しなくてはならない。従つて、リスト以外の反応はリスト作製の際の判定基準とは異つた基準に依つて判定される。それは、同一レコード内の形態水準判定に二種類の基準が使用される結果となり判定の信頼性（内的一貫性）が損われる。

Kinball は Beck と Hertz のリストでみられる判定上のズレを

指摘し、両者のリストで斯かる差異を生ずるに至った幾つかの原因を追求している。リスト作製資料の供給源である標本の差、判定基準の差、質疑知見が乏しいために生ずる反応の微妙なニュアンスの差異など夫等はそのままリスト法の限界を示している。

(三) 判定段階と尺度の問題

形態反応を F_+ と F_- に二分する Rorschach の分類に始つた形態水準の判定段階は初期の Klopfer の F_+ 、 F_- 、 F_+ の三段階、Rapsport の F_+ 、 F_+ 、 F_+ 、 F_- の四段階、更に Klopfer の一五段階に亘る評定尺度 ($-2.0 \sim +5.0$) にまで発展した。

形態水準が他のロールシャッハ・サインと異なる主要点はサイコメトリックな処理が可能なことであつて、如何なる判定法に従うにせよ吾々は一方の極に非常に歪曲した形態をもつ反応から他方の極に優秀形態を有する反応に至る連続量としての形態水準を想定することが出来る。そして段階が細分化するに従ひグロブな分類では鑑別出来なかつた診断が可能となるといつたことが期待される。しかし反対に尺度の区分法が細分化すればする程判定手続の主観性が増加する。それは主観的判断を適用する際ズレを生ずる余地が多くなるといふ意味である。

ロールシャッハ・テストはインク像に基く知覚過程と連想過程との相互作用と解されるから、形態水準は反応領域の知覚特性（狭義には形態特性）を利用して反応概念を構成する際の利用の程度と仕方であると考えられる。従つて領域特性の利用程度という量的な側面と良好に現実調和的に用いるという質的な側面とを有する概念である。従来の手続の多くは、まず与えられた概念の性質、条件を吟味しそのような概念形態上に要請される条件を領域が備えているかどうかという方向から判定された。代表的な例は Philips の基礎内容の条件を吟味する方法であり、いわば概念中心的なアプローチの立場であつて領域特性の利用（或いは無視）の程度について余り考慮されていないことは前記の通りである。吾々はむしろ領域中心的なアプローチの立場から判定すべきであると考える。領域の形態の主要特徴が生かされている反応が良好反応、それらが無視されていたり利用されていない場合が不良反応である。

扱つて次に形態水準を決定づける幾つかの因子間の関係を Klopfer に従つてシエマテックに考察したい。前記のように次の三者がある。

- ① 被検者の反応概念の形
- ② その概念の世間一般の（或いは真の）形
- ③ インク像領域の形

それ故起り得べきパターンとしては次の四種類がある。

(a) ①と②がズレていて①と③もズレている。

(b) ①と②がズレているが①と③は調和的。

(c) ①と②は調和的で①と③がズレている。

(d) ①と②が調和的で①と③も調和している。

(a) 及び (c) は明らかに「 \neg 」反応であり、(d) が「 \neg 」+ 反応なることも明白である。(b) の場合はかなり問題である。精神薄弱者や精神分裂病者が世間一般には受け容れられないような形の概念をもっているがその形は領域の形と調和している場合が之に相当する。形の上の対応からいえば斯かる反応は「 \neg 」+ であるが既に被検者の概念がありそうもない非現実的な形をもつ点では「 \neg 」と判定されるのが妥当である。要するに単なる形の上での対応関係だけでなく自然な現実的な概念が選ばれているかどうかの面が形態水準に含まれているのである。斯かる一面が形態水準の中に含まれている点は従来余り明確に規定されていなかったところであって僅かに辻が結合化について触れているに過ぎない。しかし之はロールシャッハ反応全体について考え得べき概念であって反応概念の現実度を吟味することは今後の一課題であらう。

以上吾々は現行の形態水準判定法の問題の若干を考察して来た。従来の形態水準の概念は、反応概念の明確性、反応概念の現実性、反応概念と領域との対応等が分析されないままに論ぜられていたように思われる。それらが形態水準の名の下に含められることの是非は別として判定に際しては充分区

別した上で評価されねばならない。しかし現在必要なのは新しい手続や反応リストを作製することよりも形態水準の妥当性研究を行うことであると思われる。

- (1) Beck, S. J. : Rorschachs Test. Vol. I. 1949.
- (2) Friedman, H. : Perceptual Regression in Schizophrenia : An Hypothesis Suggested by the Use of the Rorschach Test. J. proj. Tech. 1953. 17. 171-185.
- (3) Harrower, M. R., & Steiner M. E. : Large Scale Rorschach Techniques. 1945
- (4) Hertz, M. R. : Frequency Tables for Scoring Responses to the Rorschach Inkblot Test. 1951
- (5) Kimball, A. J. : History of Form-Level Appraisal in the Rorschach. J. proj. Tech. 1950. 14. 134-152
- (6) Kimball, A. J. : Evaluation of Form-Level in the Rorschach. J. proj. Tech. 1950. 14. 219-244.
- (7) Klopfer, B. & Kelley, D. M. : Rorschach Technique. 1946.
- (8) Klopfer, B. et al. : Developments in the Rorschach Technique. Vol. 1. 1954.
- (9) McReynolds, P. : The Rorschach Concept Evaluation Technique. J. proj. Tech. 1954. 18. 60-74.
- (10) 本明寛・ロールシャッハ検査に於ける良形態反応の研究。心研、一九四二、二七二—二八二
- (11) 本明寛・富田正利・ロールシャッハ・テストに於ける形態水準の評定に関する研究。フイロソフイア、一九五五、一一—二九
- (12) 村上邦男・野田寛隆・ロールシャッハ・テストによる知能診断に関する研究——年少児に試みた Klopfer 等の「Form-Level

- Rating"——心研'一九五七'二七'三七五—三七七
 (13) 長坂五朗: ロールシャッ・テストに関する研究'精神々経学
 雑誌'一九五二'五四'二一九—二五三
 (14) Phillips, L. & Smith, J. G.: Rorschach Interpretation.
 Advanced Technique. 1953.
 (15) Rapoport, D. et al: Diagnostic Psychological Testing. Vol.
 II. 1946.
 (16) Rorschach, H.: Psychodiagnostik. 1954.
 (17) Siegel, E. L.: Genetic Parallels of Perceptual Structuraliz-
 ation in Paranoid Schizophrenia. J. proj. Tech., 1953. 17.
 151-161
 (18) Small, L.: Rorschach Location and Scoring Manual. 1956.
 (19) Spiegelman, M.: Rorschach Form-Level Intellectual
 Functioning and Potential. J. proj Tech., 1956. 20. 335-343
 (20) 田中富士夫: 集団ロールシャッにおける形態水準評価の分析
 '金沢大学法文学部論集(哲史篇)'一九五六'三'一六八—
 一八三
 (21) 辻椿: ロールシャッ・テストに関する研究
 (22) Walker, R. G.: An Approach to Standardization of Rorschach
 Form-Level. J. proj. Tech., 1953. 17. 426-436.

註(1) ロケーション番号は Beck に従う。